

## 新潟県教育界における「学閥」問題（第十回）

にいがた県民教育研究所「学閥」研究会

### 第五章 「派閥」の本質（その二）

前回、新潟の「派閥」の本質を次の五つの側面に整理した。

すなわち、

- ① 公教育を支配する「インフォーマル組織」としての「派閥」
  - ② 反民主主義的利権集団としての「派閥」
  - ③ 「統制」と「競争」と「かばい合い」の「機構」としての「派閥」
  - ④ 「国策的」教育追従・推進団体としての「派閥」
  - ⑤ 反共右翼的・反勤労者的政治集団としての「派閥」
- 今回はこれらについて更に具体的に検討をすすめる。

1、「指定研究」や部活動も「派閥」が統括

——「準官制」組織を通じた「派閥」の公教育支配——

「インフォーマル組織」としての「派閥」が新潟県の公教育行政を私物化していることは前回のべたとおりである。しかし「派閥」の公教育統制・支配は単に教育委員会などによるストレートな教育行政支配にとどまらず、校長会や各種の教育研究会、あるいは小体連や中体連など、「準官制」の組織を通じても行われている。これらは郡市ごとと教科ごとにはりめぐらされたネットワークを通じて「派閥」に加わっていない教員やその教育活動にも大きな影響を与えている。

新潟県の小・中学校校長会や小・中学校教育研究会、小

・中学校体育連盟の幹部人事は「派閥」の統制下にあり、「派閥」間で「調整」されている。その一覽を第1表に示した。第1表からわかるように、たとえば小学校校長会の会長が「ときわ会」であれば中学校校長会の会長は「公孫会」であるという関係になっており、副会長は会長と逆の「派閥」が占めている。また、中学校校長会の副会長は小学校と異なり、「新陽会」のために二名制になっている。これらの校長会の会長・副会長は「派閥」の会長・副会長をはじめその「大幹部」がその席を占めているが、彼等は小中学校教育研究会（小教研・中教研）および小中学校体育連盟（小体連・中体連）の会長・副会長も兼務している。また小体連・中体連の理事長は「ときわ会」の「指定席」になっている。なお国費と県費から補助金として小教研には年間約百六十万円、中教研には百十万円が支出されている。小教研や中教研は地域ごとに、あるいは教科ごとに「研究指定校」を「指定」しているが、その「研究内容」にはしばしば「派閥」の「研究」スタイルがもちこまれる。また「研究指定校」をひきうけるにあたって、校内の教員の合意が必ずしも十分でなく、校長が独断でひきうけてきたり、「派閥」会員の「出世」の足がかりにされていることも多い。このような場合には、他の教員は「無益な努力」だと感じつつ、「指定研究」に動員されるはめになる。また小体連や中体連の「統括」している運動クラブなども「校

第1表 新潟県小・中学校の校長会、教育研究会  
および体育連盟の会長・副会長と「派閥」との関係

		1983 (S. 58)	1984 (S. 59)	1985 (S. 60)	1986 (S. 61)	1987 (S. 62)	1988 (S. 63)
新潟県 小学校長会	会長	高橋 隆一(白山小) (ときわ会理事・A)	高橋 隆一 (ときわ会理事・A)	下村 晋一(大手町小) (公孫会会長・B)	下村 晋一 (公孫会会長・B)	堀野三郎(新潟小) (ときわ会会長・A)	堀野三郎 (ときわ会会長・A)
	副会長	笠井 永吉(大町小) (公孫会会長・B)	笠井 永吉 (公孫会会長・B)	押木 卓二(藤原小) (ときわ会理事・A)	押木 卓二 (ときわ会理事・A)	大淵 哲也(奥町小) (公孫会会長・B)	大淵 哲也 (公孫会会長・B)
小学校教育研究会 (小教研)	会長	高橋 隆一 A	高橋 隆一 A	下村 晋一 B	下村 晋一 B	堀野三郎 A	堀野三郎 A
	副会長	笠井 永吉 B	笠井 永吉 B	押木 卓二 A	押木 卓二 A	大淵 哲也 B	大淵 哲也 B
小学校体育連盟 (小体連)	会長	高橋 隆一 A	高橋 隆一 A	下村 晋一 B	下村 晋一 B	堀野三郎 A	堀野三郎 A
	副会長	笠井 永吉 B	笠井 永吉 B	押木 卓二 A	押木 卓二 A	大淵 哲也 B	大淵 哲也 B
	理事長	若林 栄(栄小)	日谷 重吾(大形小) A	日谷 重吾(嵐山のF小) A	日谷 重吾 A	日谷 重吾 A	日谷 重吾 A
新潟県 中学校長会	会長	百尾 勇聖(城西中) (公孫会会長・B)	百尾 勇聖 (公孫会会長・B)	藤村 正昭(鳥羽野中) (ときわ会会長・A)	藤村 正昭 (ときわ会会長・A)	本山 松郎(城西中) (公孫会会長・B)	本山 松郎 (公孫会会長・B)
	副会長	藤村 正昭(鳥羽野中) (ときわ会理事・A)	藤村 正昭 (ときわ会理事・A)	百尾 勇聖(城西中) (公孫会会長・B)	本山 松郎(城西中) (公孫会会長・B)	江口 晋一(白新中) (ときわ会理事・A)	江口 晋一(鳥羽野中) (ときわ会会長・A)
中学校教育研究会 (中教会)	会長	丸山 吉蔵(長岡東中) (新陽会副会長・C)	丸山 吉蔵 (新陽会副会長・C)	岡 憲一(長岡東中) (新陽会副会長・C)	岡 憲一 (新陽会副会長・C)	岡 憲一 (新陽会副会長・C)	岡 憲一 (新陽会副会長・C)
	副会長	藤村 正昭 A	藤村 正昭 A	百尾 勇聖 B	本山 松郎 B	江口 晋一 A	江口 晋一 A
中学校体育連盟 (中体連)	会長	丸山 吉蔵 C	丸山 吉蔵 C	岡 憲一 C	岡 憲一 C	岡 憲一 C	岡 憲一 C
	副会長	若尾 勇聖 B	若尾 勇聖 B	藤村 正昭 A	藤村 正昭 A	本山 松郎 B	本山 松郎 B
	理事長	丸山 吉蔵(長岡中) A	丸山 吉蔵 C	岡 憲一 C	岡 憲一 C	岡 憲一 C	岡 憲一 C
	理事長	太田 正(舟栗中) A	太田 正 A	藤田純二(山崎中) A	藤田純二(舟栗中) A	藤田純三(内野中) A	藤田純三 A

Aとはときわ会、Bは公孫会、Cは新陽会を示す。  
ちなみに新陽会の会長校は新潟市立岩戸中学校(丸山吉蔵校長)である。

威発揚」が管理職によって強調され、「派閥」会員がそれに「忠誠」を尽くそうとする場合には教育的見地や教師の労働条件などは「忘却」され、行きすぎた「勝敗主義」の「とりこ」になる。「ときわ会」のある「拠点校」では部活の引率のための旅費を請求したところ、「勝つ見込みがあるのか。」と一かつされたという。

### 「校務分掌」も「派閥」の「酒席」で決定

― 日常の学校運営にもしみわたる「派閥」の公教育支配―

「派閥」の公教育支配は教育行政やもろもろの「準官制」組織を通じてばかりでなく、日常の学校運営にまで「しみわたって」いる。ひどい学校では校務分掌も「派閥」の「酒席」で「決定」されている。

新潟市内のM小学校はそれまで校長・教頭ポストとも「ときわ会」の「指定席」であったが、一九七七(昭五二)年に校長が「公孫会」にかわった。教頭もその時「公孫会」にかわった(「公孫会」は新潟市内での「陣地拡大」を当時とくに画策していた。一九七三(昭四八)年当時、新潟市内での「公孫会」校長ポストは大畑小、山の下小、木山小の三校のみであったが、現在では小学校十校、中学校一校となっている)。教員の「入れ替え」も進められ「公孫会員」が増加した。それまで年一回、たけの子のとれる五月上旬、旧職員を集めて行

われていた「たけの子会」も廃止された。

校内の「公孫会員」は土曜日の午後になると校長の自宅に集まり、その次の週の校内の「方向づけ」について話し合っていた。「会」はまずマージャンから始まり、次第に酒が入るようになった。「酒席」では校務分掌をはじめ組合対策に至るまで話が出された(なお「教務主任」は「ときわ会」であったのでこの「会」には出ていない)。

校内教員の「公孫会」への「勧誘」も執拗であった。まず独身教員、新採用教員が狙われた。次に既婚の若手女性教員を「勧誘」しようとしたが、彼女はなかなか応じなかった。教頭がその「先頭」にたち、彼女の教室に出向いたり、呼びつけたりしたが、その回数是一年のうちに四十回にもなった。校長や他の「公孫会員」も彼女を「説得」しようとしたが、こちらの方も三十回にもなった(つまり彼女は「公孫会」からの「誘い」を七十回も断わらねばならなかったのである)。校長や教頭は彼女に対して「お前の異動の時はおまらざるぞ。」とか「公孫会に入らないと校内の秩序が保たれない。」などといひ続けた。これらの「派閥」の「行為」は新教組大会でも報告された(「新教組週報」第一〇七九号、一九八二年六月二十日)。早速、校長・教頭は「報告者」に対して「あの話は本当か。そんなはずはない。」と迫った。「報告者」が逆に「その事実(土曜日に「公孫会員」が校長宅に集まっていること)はないのか。」と問い正すと黙ってしま

った。その女性教員はついに「公孫会」に加入しなかった。彼女の異動の時、校長は転勤先についてなかなか本当のこゝとをいわず、「山の中らしい。」とか「いやみ」をいい続けた。

「派閥」はまた組合活動も妨害した。ある先生が校長に「組合で出張しますのでよろしく。」と言っても返事をしないことが二年間も続いた。親には「あの先生は組合にいくことが多いのでいい教育ができない。」と悪宣伝した。しかしその先生は生活指導主任でもあったので非行対策・生活実態調査、父母こんだん会、校内生活指導学習会などに積極的にとりくんだ。ところが「派閥」はこれらにことごとく「けち」をつけてつぶそうとした。「派閥会員」の中にもその実践に共鳴する人がでてくるとそれらの先生に対しても「派閥」は「紙をつかいすぎる。」とか「学級通信を出すだけがいいというわけじゃない。」とかいやみで「いじめ」た。その「先頭」に立ったのは年配の女性「公孫会員」であった。このように「派閥」は学校現場でも日常的に公教育を支配している「インフォーマル」組織であり、同時に教員の人権と自主性を蹂躪し、民主的学校づくりの努力を妨害しようとする組織でもあるのである。

## 2、附属学校人事をめぐる怪文書

——反民主主義的利権集団としての「派閥」——

「派閥」が校長・教頭ポストなどの管理職ポストや教育行政における教育長、管理主事、指導主事など公的なポストを「指定席」化、私物化していることはこれまで明らかにしてきたとおりである。また人事異動にあたっても、公的な異動であるにもかかわらず、「派閥」会員に「便宜」がはかられ、「派閥」に属さない教員を差別していることは「派閥」自身が新入会員の「勧誘」などにあたって「公言」しているところである。このほか「海外派遣研修」や現職のままの大学院進学、あるいは教員採用時におけるコネ採用など「派閥」の反民主主義的な利権支配は新潟県小中学校教育界のあらゆる場面に及び、更に「派閥」の幹部には退職後、市町村教育長や新潟市総合教育センター所長、厚生財団役員などへの「再就職」の道まで特権的に確保されている。

ところで国立学校である新潟大学教育学部および上越教育学部附属学校の教員人事も「派閥」の支配下にある。資料1（次ページ）は新潟大学教育学部附属長岡中学校の教員人事（理科）をめぐる「怪文書」である。「九月」の日付があるところから、かなり早い時期に何者かがどこかで「順位づけ」をした「資料」と考えられる。ちなみに「候補者」は全員が「ときわ会」（附属長岡中学校の理科教員は二名とも「ときわ会」の「指定席」）であり、「期」とあるのは「ときわ会」の「格付卒業年度」であり、「ときわ会」の「年度

資料1 新潟大学教育学部附属長岡中学校教員人事を  
めぐる怪文書

(秘)

附属長岡中学校理科教官候補

昭和55年9月

順位	氏名	年令	期	現任校	現住所
1	○ ○ ○ ○	36才	14期	長岡南中 県教育センター 長期研修	長岡市宮内
2	△ △ △ △	42才	8期	県立教育センター	長岡市水梨町
3	□ □ □ □	38才	12期	市理科センター	三島郡越路朝日
4	▽ ▽ ▽ ▽	39才	11期	長岡南中	柏崎市荒浜

注 附属長岡中学校構成員  
18名(長期研修も含めて)のうち  
40才以上が11名  
現理科教官××××は13期

(原文書では符号のところに氏名の記入がある。)

「会」が国立学校人事に介入していることを示唆している。結果的にはこの年はこの「怪文書」の順位三位が着任した。国立大学附属学校は「教育委員会」の権限外にあり、大学の自治機能の発揮の下に、いかなる権力の干渉もうけずにそれにふさわしい人事が行われるべきである。ところが現実にその人事は「派閥」という「インフォーマル組織」

によって「好きなように」行われており、そのようにして決定された「大学の意志」とは無関係な教員が大学の教員養成にも大きな影響を与えている。それどころか、「ときわ会」の事務局は附属新潟小学校に、「公孫会」の事務局は上教大附属小学校に置かれている。そして「ときわ会」の「本部幹事」六名は附属新潟小・中学校の副校長・教頭の計四名と「ときわ会」会長・副会長の在任校である新潟市立鳥屋野中学校および新潟小学校の教頭二名で構成されている。さらに附属新潟小学校には「ときわ会」雇の「専任事務職員」まで配置され、副校長の「閥務」の「秘書」役をつとめている。「ときわ会」の「研究発表会」もしばしば附属学校を会場にして行われる。また上教大附属小学校副校長は代々「公孫会」幹事長をつとめ、「公孫会」本部幹事会会務分担の五つの部門のうち、「企画部」、「会計部」、「研修部」、「広報部」の四部門を上教大附属小・中学校で「担当」している(残りの「庶務部」は上越市立大町小学校の教頭が「担当」している)。

管理主事が「派閥」の「酒席」で異動の面接・懇談

——「公孫会柿崎支部」の一年間の「活動日誌」から——

さて「派閥」は一年間を通じてどのような「活動」を行っているのだろうか。その例を「派閥」の「支部」の年

## 資料2 「公孫会柿崎支部」の年間の「活動」例（1981年度）

4月18日(土)	「公孫会」支部長会（上教大附属小）
29日(休)	「公孫会」評議員会（上教大附属小）
5月2日(出)	支部監査会および理事会（柿崎小）
9日(出)	柿崎支部総会（岩尾公孫会副会長出席）（柿崎小）
23日(出)	支部研修会発会式（講師渡辺前公孫会高田支部長）（柿崎小）
6月11日(休)	支部幹事会（ぎんなん荘）
6月20日(出)	「公孫会」支部長会（松苑閣）
7月20日(月)	機関紙「公孫柿崎」18号発行
8月7-8日	「公孫会」中堅教員研修会宿（妙高中）
18-19日	「公孫会」幹部教員研修会宿（妙高中）
10月17-18日(土・日)	柿崎支部会宿研修会（大潟町玉屋）
11月5日(休)	「公孫会」上越地区支部長会（松苑閣）
14日(出)	連絡委員会（長岡市表町小）
22日(日)	上越ブロック教頭面接練習（高田西小）
26日(休)	柿崎支部動統20年以下教員年層別総会（柿崎小）
12月5日(出)	柿崎支部理事会（柿崎小）
12日(出)	二次面接練習（柿崎小）
12日(出)	柿崎支部講演会（柿崎小）
14日(月)	上越ブロック支部長会（松苑閣）
16日(休)	支部研修反省懇話会（岩野屋）
21日(月)	機関紙「公孫柿崎」19号発行
22日(火)	管理主事との異動懇談会（大潟町玉屋）
23日(水)	公孫会支部長会（松苑閣）
1月12日(火)	管理主事との面接・連絡
16日(出)	連絡委員会（高陽荘）
18日(月)	三町（柿崎町・大潟町・吉川町）教育長連絡会（岩野屋）
2月6日(出)	柿崎支部動統21年以上教員年層別総会（岩野屋）
3月6日(出)	支部幹事会（高陽荘）
10日(水)	柿崎支部動統31年以上教員年層別総会（岩野屋）
10日(水)	支部理事会（柿崎小）
12日(金)	助成論文指導委員・会報編集委員合同反省会（岩野屋）
18日(休)	機関紙「公孫柿崎」20号発行
22日(月)	「公孫会」上越地区支部長会

間の「活動」を通してみてみよう。資料2に「公孫会柿崎支部」の年間活動（一九八一年度）を示した。各「行事」の曜日にも注意されたい。なお柿崎小学校長が「支部長」である。

一年の「流れ」は次のようである。まず四月中旬から六月中旬ごろまでは新年度の「派閥」の各種の会合が持たれる。それから十月までは主として「研修」という名の「洗脳」であり、夏休み中の「研修合宿」は「管理職」を「めざす」ための「閥内競争」の行事である。十月半ばごろから「動き」があらたにくくなる。まず「管理職」への昇任をめぐって「派閥」内部で「連絡・調整」のための種々の会合が持たれ、また「面接」

の練習も行われる。十一月に入るとそれらに「人事異動」についての「連絡・調整」のための「派閥」の各種の会合が加わり、それが一月下旬までつづく。この間、十二月二日（火）には大潟町玉屋において「管理主事」と「公孫会柿崎支部」との「異動懇談会」が持たれている。この年度、「公孫会柿崎支部」からは「渉外費」という名目で「管理主事との打合わせその他」として四万円が支出されている。良識ある「管理主事」であるならばこのような「行動」は慎むべきであろう。二月・三月は各種「慰労」のための「会合」（飲み会）が持たれる。この頃は「派閥」に入っていない教員にとっては「異動」の「ヤマ場」である。この一年間の「活動の流れ」は「派閥」の本質を如実に示している。

教員の異動にあたって「派閥」は「会員」に「個人調査」の提出を指示している。資料3はそのような「指示文書」の一例で、「ときわ会西蒲燕連合会」の「文書」（昭五六年度）である。「個人調査」には「調査記入要領について」に示されている項目のほかに次のような事項の「記入欄」がある。◎本籍地 ◎自家・借家・間借・アパート ◎校務分掌・主任経験 ◎研究実績等（過去・現在推進中も含む）◎長期研修・講習会・内地留学・海外派遣・視察等の経験◎通勤手段（自家用車の場合は車種・ナンバーおよび自宅から学校までの所要時間） ◎趣味・特技（学生時代の所属クラブ）

◎血・姻族中の教職関係者 ◎その他参考事項（○○地に住宅新・増改築中、○○年度県展入選、○○年度小・中教研○○部長・推進委員等、郡・県教育諸団体役職歴、教組支部・本部役職歴など参考になることから）。なお「展開」とは「派閥」の用語で異動や昇任など今後の「身の振り方」を指している。これらの「項目」には「派閥」の「社会的センス」がよく「にじみ出て」おり、また「組合」（「主流派」）を「統制」下においている「余裕」がうかがえる。

「公孫税」は高いけど……

——利権を背景にした「集金機構」としての「派閥」——

ある県では校長になるのに数百万円かかるとか、教頭になるのにいくらいかかかったとかささやかれている。新潟県でも「管理職」になるには「派閥」に入って「忠誠」を尽さねばならず、また利権的人事異動にあずかるにすることもとは同様である。「公孫税は高いけど……」と前置きして「勧誘」をうけた新人教師もいる。

さて「派閥」に支払う「カネ」は一体どのようになっているのであるうか。それは①「正規」の会費、②種々の寄附金など、③「飲み会」や「研修会」等の経費などがある。このほか「つけ届け」のための費用や「派閥会員」およびその家族の「冠婚葬祭」にかかわる「交際費」もかなりの

西希葉とよむ選台長  
会委員各位殿

西希葉とよむ選台会長 遠藤成作  
全上組村各委員長  
（印）

会委員各位にお願ひ  
会委員各位にお健勝で活動のこゝろ思ひます。  
さて、昨年度(54)選台会組織対策上の重要事業として全会委員対象に別紙個人調書を作成して、世話活動相談活動等々有効的に活用してまいりました。(たいへんな作業量となります)今年度可忍御座いますか。あらかじめご記入いただいた「生活投書」支那にてご返事をお願ひ申しあげます。

1. 調査提出期限 6月30日(水)迄  
投書は手紙で提出して下さい。

2. 全上提出先 各支部組村各委員宛  
第一小池中 横田 雅一 尾崎 小成 田中 吉田 栗生 小坊 藤原 大野 中田 伊藤 渡辺

3. 提出郵致 電子コピーで10部

4. 作成要領 別紙記載のとおりです。

(別記) 調査記入要領

1. 「年度」は、西暦年(西暦)に記入する。
2. 「所属」は、所属する支部を記入する。
3. 「性別」は、男、女を記入する。
4. 「現住所」は、現在の住所を記入する。
5. 「職業」は、現在の職業を記入する。
6. 「所属団体」は、所属する団体を記入する。
7. 「担当」は、担当する団体を記入する。
8. 「健康状態」は、健康状態を記入する。
9. 「学習内容」は、学習内容を記入する。
10. 「今後」は、今後の学習内容を記入する。
11. 「身体状況」は、身体状況を記入する。
12. 「健康状況」は、健康状況を記入する。
13. 「家族関係」は、家族関係を記入する。
14. 「その他」は、その他を記入する。



第2表 「公孫会費」の一例（年額）（1987年度）

	校長	教 頭	教 諭 男	教 諭 女
本部会費				
一般会費	5,000円	4,000円	3,000円	2,500円
特別会費	7,000円	4,000円	0円	0円
支部会費				
定率分(本俸× $\frac{15}{1000}$ )	8,000円	6,000円	4,000円	4,000円
定 額 分	2,000円	1,500円	1,000円	800円
年度会費	15,000円	10,000円	4,000円	4,000円
合 計	37,000円	25,500円	12,000円	11,300円

金額になる。

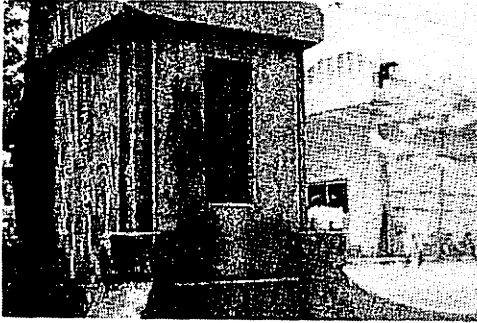
「会費」は「本部会費」、「支部会費」および「年度会費」の「三本立」である。「支部会費」と「年度会費」は「派閥」の中でも「支部」や「年度」によって異なるが、「公孫会」の場合についてその一例を第2表に示した。その「利権」にあずかる程度に応じて「職階別」および「男

女別」に「格差」が設けられ、女性には「割引料金」となっている。また新人教員の「獲得競争」に「打ち勝つ」ために、「特別会費」は「管理職」を「増額」し、一般教諭を「減額」する「方針」がここ数年にわたってとられてきた。「ときわ会」の「正規」の会費は「本部会費」と「支部会費」をあわせて年額で

俸給月額額の十二分程度であり、これを五月から二月まで十分分割で支払う。「ときわ会」の「支配下」にある学校では給料から「天引き」される。三十五才前後の教員で月額三五〇〇円、年額三万五千円程度となる。このほか年度会費（年間五〇〇〇円程度）は別に支払う。ちなみに「正規」の「会費」は「ときわ会」よりも「公孫会」の方が「安い」が、それは女性からも「集金」していることによる。

「ときわ会」本部会費の総額は年間五〇〇〇万円を突破している。このうち一〇〇〇万円以上が「諸会議」のための「旅費・日当」などに、同じく一〇〇〇万円以上が「連絡渉外費」にあてられ、その明細は明らかではないが多額の予算を使った「渉外」活動が行われている。また「ときわ会」は巻原発の建設をすすめている東北電力の株券を約二〇〇〇株所有している。なお「派閥」の「年度会」の中には「管理主事接待・挨拶回り手土産」（「渉外費」）として三〇万円近くを支出している「年度会」もある。

つきに「寄附金」についてみてみよう。「派閥」からの「寄附」の要請はしばしば「忠誠」を試す「踏絵」となる。上越教育大の開設にあたって「公孫会」が「会員」に一人当り五万円から九万円の「寄附」を「割り当て」たことは余りにも「有名」である（本連載第五回参照）。また「公孫会」では「管理職」昇任をめぐって「なまぐさい」年齢となった各「年度会」は、「卒業三十周年寄附」なるものを



第1図 今だに正門脇に残されている「紀元二千六百年記念」の「八紘一字」の碑  
(新潟市立内野小学校=校長はときわ会)

東南アジア侵略を「正当化」するため  
にさかんに用いられたスローガンで  
近隣諸国を「皇国  
としての日本」の  
支配下に置くこと  
を意味している。  
このような過去の  
悪しき「国際化」  
の「遺物」を今だ  
に残存しながら一  
方では教育におけ  
る「国際化」がさ

「公孫会」本部に「寄納」し、「年度会」としての「忠誠」を「尽し」ている。このような「寄附金」は大正二年、当時の高田師範学校校友会が、明治の御代を追慕し、生徒の涙ぐましい努力奉仕によって建立された「聖徳記念碑」の移転・整備工事費などに充てられている（「公孫会報」第七八号、一九八四年七月）。「派閥」は「過去の遺物」が「大好き」である。今でも「紀元二千六百年」記念の「八紘一字」の碑が残されている小学校がある（第1図）。ちなみに「八紘一字」とは第二次世界大戦当時、日本の中国・

かに「強調」されている。「ときわ会」にあっては現在、「新潟師範学校記念碑建設」（一九八八年度内予定）の寄附事業が一〇〇〇万円の予算ですすめられ、新潟師範関係の「会員」には一人二万円（一〇五〇〇〇円）が「割り当て」られ、関係する「年度会」がその年度としての「出資総額」を競っている（なお「病氣その他の事情よっては一〇未満でもよい」という「注釈」があり、払わないものは「特別の事情」があると見なされる）。また「新潟大学教育学部長岡分校跡地記念碑建立」（一九九〇年十月予定）の寄附事業も一〇二〇〇〇円以上で進められているがその「発起人」のうち男性九四名は全員が「ときわ会」であり、「ときわ会」各年度の「年度幹事」などが名を連ね、「公孫会」に対する「デモンストレーション」の「意味」をもつ「事業」となっている。また「教育学部同窓会」は「新潟大学国際交流後援会」（会長・君 健男新潟県知事）の「寄附」の「集金機構」ともなっている。

### 3、女性教員の「統制」・「催眠」機構としての「女教員会」

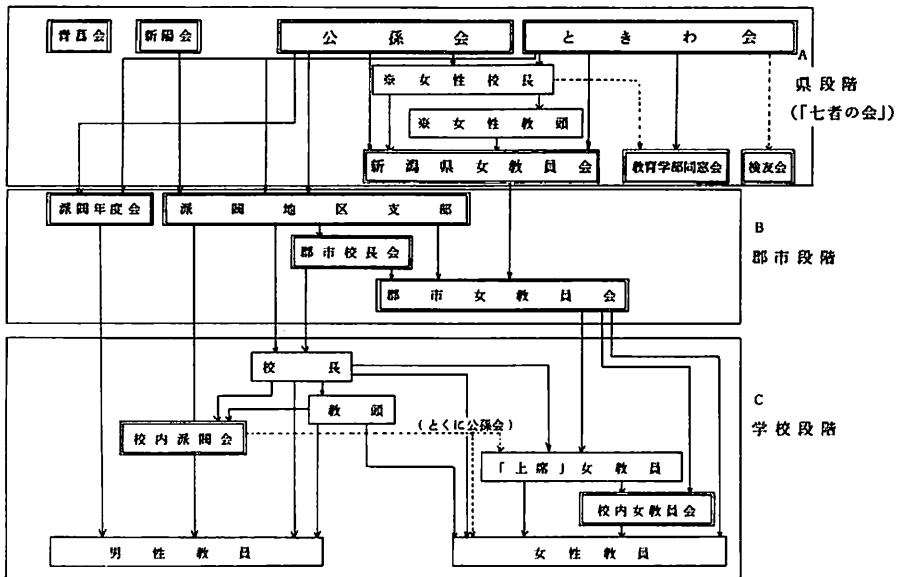
——「統制」と「競争」と「かばい合い」の「機構」  
としての「派閥」——

「派閥」は社会的にみると公教育を支配している「イン

「フォーマル組織」であり、また反民主主義的な「利権集団」であるが、個々の教員に対しては「統制」と「競争」と「かばい合い」そして「利権供与」の「機構」として「機能」している。この点についても「ときわ会」や「公孫会」の実態については、これまでにかなり述べてきたので、ここでは「女教員会」について、その点を検討してみよう。

「女教員会」は「ときわ会」や「公孫会」などの「派閥」とは異なり、「管理職」ポストは極少数であり、また人事異動にあっても、「女教員会」が直接介入するというとはあまりない。つまり「利権」を背景にして「派閥」が成立しているようには一見、見えず、さりとして女性教員の「地位向上」の期待を委ねられるような組織でもない。にもかかわらず、三五〇〇人を越える女性教員が「女教員会」に会費（本部会費八〇〇円、支部会費六〇〇円前後）を支払っている（支払わされている）。「秘密」はどこにあるのであろうか。

第2図に女性教員に対する「女教員会」と「派閥」の管理・統制の関係を図示した。「友情の輪を広げ研修を深めよう」というのが「女教員会」の表向きの「スローガン」であるが、この図からわかるように、「女教員会」は県段階、郡市段階および学校段階のいずれのレベルでも他の「派閥」、とくに「ときわ会」と「公孫会」の「統制」をうけている。たとえば都市段階での「女教員会」の「総会」



第2図 「派閥」による男性教員・女性教員の管理統制ラインと「女教員会」の役割

にはその地域の「派閥」の「有力校長」が「激励のことは」をのべたり、「講演」を行うのが「恒例」となっている。

またその地区の校長会から資金援助をうけている「郡市女教員会」もある。県段階では「女教員会」は他の「派閥」とともに「七者の会」を構成し、県「女教員会」中央大会

（毎年六月中旬）では新潟県教育長の「挨拶・指導」に加えて、小・中学校長会会長の「祝辞」が「恒例」となっており一九八八年度では塚野巳三郎「ときわ会」会長と本山松郎「公孫会」会長に「祝辞」の場が与えられた。また「青年女教師研修会」や「女教員会夏期大学講座」などでは「先輩に学ぶ」として清田麗子「女教員会」前会長（現新潟市教委指導主事（家庭））の「御指導」や「会員」による「文部省中央研修会を終えて」、「海外短期派遣を終えて」、「道徳指導を通して考えること」などの「報告」や「実践発表」が会員外の「講演」や「実技指導」とあわせて行われている。なお「女教員会」には国費と県費から、毎年二〇万円の「資金援助」が行われている。

以上のように「女教員会」は「派閥」による新潟県の公教育支配を「容認」するどころかすすんでそれに加担し、「派閥」の利権的公教育支配のもとで本来の女性教職員の地位や教育・労働条件の向上、さらには新潟県教育界の民主化の要求と運動をねむらせる「催眠」機構としての役割を果たしている。つまり「女教員会」は女性教員にとって

必要な組織ではなく、「派閥」の県教育界支配を補完するものとして、「派閥」にとって必要な組織なのであって、その「活動スタイル」は「派閥」のそれを「模倣」している。

このような「派閥」の「意」をうけて「女教員会」の「役割」を「積極的」に「推進」しているのが極少数の女性校長・教頭（第2図の※印）である。ちなみに「女教員会」本部役員十二名（会長・副会長・幹事）はすべて女性「管理職」で構成されている。彼女らは「管理職試験」の「手ほどき」を「ときわ会」や「公孫会」の管理主事経験者などから受け、「管理職」「登用」にあたっては、しばしば男性教員の「出世頭」と同様の若い年令で昇任し、長年にわたって「女教員会」幹部として「優越感」にひたりながらその「役割」を果たしている。「女教員会」への「勧誘」にあたっては「女なのに何故「女教員会」に入らないのか。」といったのが彼女らの「殺し文句」である。

「派閥」は「冠婚葬祭」互助センター？

——「かばい合い」の機構としての「派閥」——

「派閥」は「統制」と「競争」という「機能」のほかに、「かばい合い」という「機能」をもっている。「統制」は「自己規制」に「転化」する。たとえば教科書選定委員に

選ばれて、「この教科書がいい。」と思っても電話などで「派閥」幹部から別の教科書の「指示」があれば「ぐっ」とこらえてその「指示」に従うことになる。授業にあたって「学習指導要領」からはずれてはいけない。」というのは「派閥」幹部の意向であることは「言われなくてもわかっている」のでそれから「はずれる」ような「教材研究」は「自粛」する。「学習指導要領」は「最高の文化遺産」などというようなことまで言う教師もいる。「派閥」に「ひたっている」うちに教師の「生きがい」は「出世競争」に矮小化されていくが「競争」は「忠誠心」と「派閥」の「意」にそう「業績」の「発揮」の「競争」となる。職場における職務上の公的な人間関係が私的な「義理」の関係に「転化」する。公教育は国民・県民の血税により、憲法・教育基本法などにもとづいて、国民・県民から負託された仕事であるのに、まるで「派閥」幹部によって「仕事をさせてもらっている」かのような「錯覚」におち入り、「子どもの状況」よりも「派閥」の幹部や「管理職」の「目」の方が気になってしまふ。このような状況のもとで「権力」の「ふところ」の中の「かばい合い」は「派閥」会員の「心理」と「実生活」に「投影」する大きな「安心」の「機能」でもある。

「冠婚葬祭」は「派閥」の「世界」の一大関心事である。「会員」の葬儀には「派閥」が「下働き」をしてくれる。

「会員」の子弟の結婚式には「親」の「派閥」仲間や「幹部」が出席し、「仲人」を引き受けたりもする。「叙勲」となれば更に大変である。「慶弔」にあたっては「個人的」なものほかに「派閥」やその「年度会」から「祝儀」や「香典」が届けられる。このような「伝統」は戦前からひきつがれている。たとえば中国侵略開始後の一九三七（昭和十二年）九月、「公孫会」は会員にして応召出征した場合、1 餞別を一人につき十円をおくる。2 戦病傷に対して一人につき見舞十円をおくる。3 戦死の場合は香典十円花環代（十円）一箇、若くは合計二十円の現金をおくり弔辞を呈す」ことなどを決めている（「公孫樹下の八十年」一九八二年、公孫会）。

このような「かばい合い」の精神は「会員」の「不都合」に対しても「発揮」される。「飲酒事故」や「校内における不祥事」などに対しては「もみ消し」がはかられる。また公開の席上での討論などにおいても「会員」が「窮地」に「陥った」時には「助け舟」が出される。そして何よりも「派閥」の行っている社会的不正に対しては「派閥」会員はお互いに「かばい合っ」て口をつぐみ、そのくせ「恥しらず」にも「表向き」には教師の「倫理感」を「堂々」と「主張」しているのである。